

図 画 工 作 科

1 基本的な考え方

図工科では「よろこびを生む授業」を、本年度は粘土を使っの立体表現の過程に視点をあてて考えた。

自由な可塑性と粘性を持つ土粘土を素材とし、粘土を操作させる手順、学年の制作の方向や授業におけるゆさぶりの方向を明らかにして、よろこびを生む授業を探ってみた。

1 よろこびについての考え方

図工科では制作活動におけるねらいを、内的体験と外的体験の結びつきとした。つまり、子どもの表現内容と指導者の意図をかかわりあわせることである。

(1) 内的体験

内的体験とは、作る主題にかかわるもの、例えば、おもしろいくつの形を作る題材では、子どもの願いを聞いてくれるくつは、どんな形にすればよいか考えることである。うさぎを作ろうでは、うさぎを見て感じたことなど、個々の

子どもが持つ表現したい願いである。

(2) 外的体験

外的体験とは、主題を表現するための手だて（技法）として、スケッチやクロッキーをもとにして、物を見る目と感じ方をどのように身に付けるかということと、粘土のもつ可塑性や粘性の性質を、どのように利用して作品に生かすかということである。

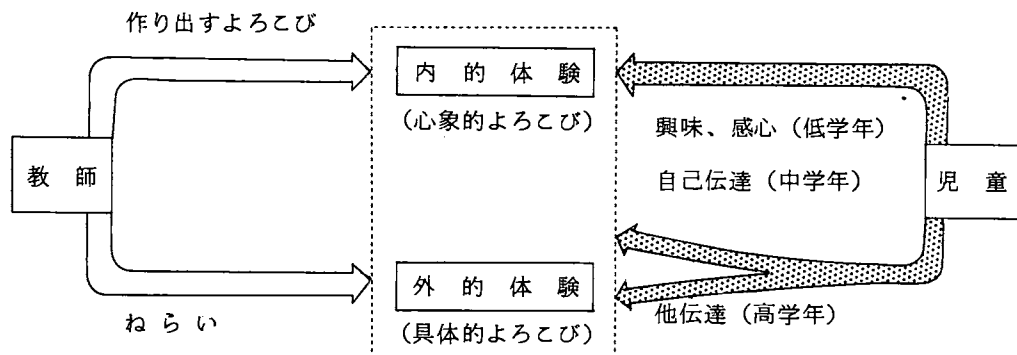
子どもは、外的体験である物を見る目、感じ方と粘土表現の技法を結びつけて内的体験を表現する。

(3) 教師の側では

教師が授業する上で留意しなければならないことは、内的体験としては、制作のよろこびをどうつけさせるかである。外的体験としては、授業のねらいに即して身につけてゆく技能をどうつけさせるかである。

(4) 児童の側では

低学年では、内的体験として、興味や関心におく。外的体験として、触れさせて粘土の性質



を体得させる。

中学年では、内的体験として、自分をどう表現するかにおく。外的体験としては、表現するために、こんなことをするという自分なりの技術の工夫をする。

高学年では、内的体験として、自分の主題を他にもわからせること。外的体験としては、立体表現にかかわる造形技能をつけることである。

以上の考え方を図でまとめると、前のページのようになる。

2 制作活動の視点

低学年では、粘土を操作するよろこびに浸らせ、作っていく中でよろこびを生むようにした。

中学年では、手ごたえのある造形活動を通して、内側から燃焼させるようにした。子どもの個性や感じ方を尊重し、ゆとりをもって子ども自身が自分の表現を発見してゆく中でよろこびを生むようにした。

高学年では、見たことや想像したことを、計画的に表現し、制作意図やねらいを作品に表現できるよろこびを生むようにした。

2 粘土を操作させる手順

制作のよろこびとは、子どもが主体的な制作活動を展開することである。そのことは、子どもが自ら学習主題にそって働きかけていくことである。働きかけることは、内的体験にそって外的体験をいかにこなしていくかである。外的体験をいかにして操作してゆくかが指導のポイントとなる。

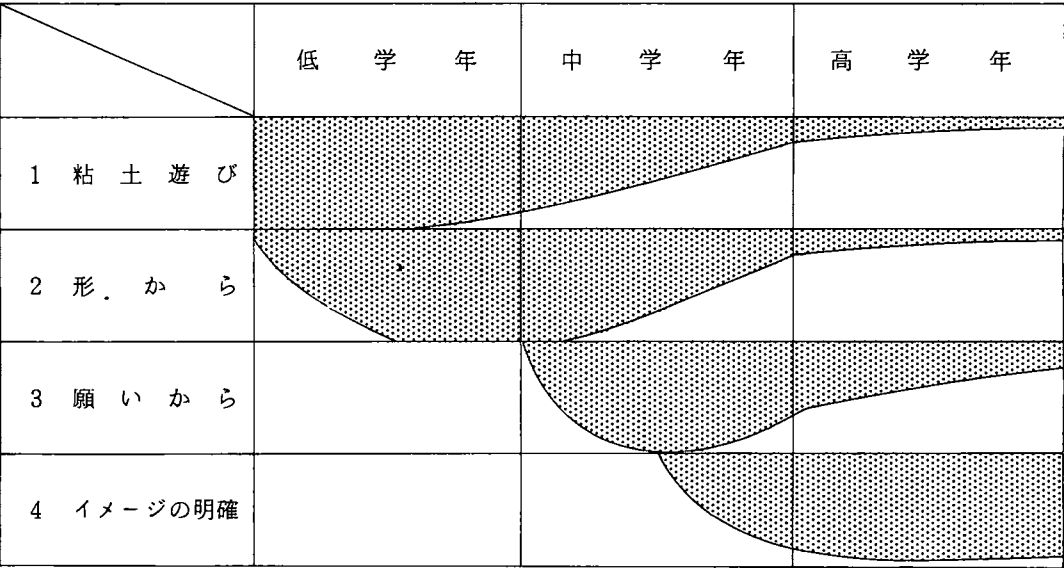
1 学年別操作の柱

よろこびを生む手だてとしての立体表現の操作活動を、1. 粘土遊び 2. 形から 3. 願いから 4. イメージを明確に の4つの事柄を設けた。

4つの事柄の粘土遊び、形から、願いから、イメージを明確には、それぞれ独立した活動としてとらえるのでない。

例えば、高学年の段階である、イメージを明確にする制作活動では、低学年の活動である粘土遊びも取り入れている。この粘土遊びの活動は全学年を通じて取り入れ、すぐ作品作りに入るのではなく、表現の中で取り扱う題材に転移できる要素を取り入れ遊びさせるのである。理屈ではなく、体に粘土をなじませるのである。

4つの段階での、低、中、高学年における操作活動の重点と重なりは、下の表の様な分布と考えた。



粘土の操作手順を、子どもが身につけることと次の表となる。
指導手順、学年別の大きな制作の方向にまとめ

粘土操作の手順	身につけること	学年	制作の方向	指導手順
1 粘土遊び	・粘土をわからせる	1	・材料体験 ・感触体験	さわる → 作る → 使う
2 形から	・形や大きさを考えて ・形から連想して作る ・立たせる	2	・形のちがい ・大きさ	基本形 → 連想 → 説明 → 鑑賞
3 願いから	・1つの粘土のかたまり ・粘土を取り去る、加える、変形する	3	・立体的なものの見方	
4 イメージを明確	・全体と部分の関係 ・部分を組み合わせた大まかな形 ・各自の見方や考え方があった方法	4	・かたまり ・形のつりあい	発想 → 構想 → 技能・技術の駆使 → 鑑賞
		5	・形の安定、調和 ・視点、動き	知覚 → 発想 → 構想 技能・技術の駆使 → 鑑賞
		6	・要素の総合 ・触覚的なとらえ	

3 各題材におけるよろこびの造形、技能

粘土を扱うについては、低学年は粘土そのものに親しむ。中学年では粘土を自由に操作し、高学年では、立体表現の中核である量感、空間、

面、地はだ、安定感、動勢などを主とした指導の視点とした。そして、表現するよろこびや制作意欲のよろこびも失なわせないように配慮した。そこで、題材ごとのよろこびを生む授業を設定するために、造形的なねらいと技能的なねらいを洗い出した。

学年	題材名	造形的ねらい	技能的ねらい
1	おかしやくだもの	粘土に親しみ、なれる	たたき伸ばしたりして基本形を作る
	大きいのりもの	粘土の性質を感じとる	丸める 伸ばす つまむ つける 重ねる
	動物さんこんにちわ	作るよろこび	くっつける つまみ出す
2	おもしろい顔	顔、目、鼻を工夫して作る	板にする つける ひっかく
	私と友だち	形、動きを大づかみに	ひねり出し 手足のかたむき
	乗ってみたい動物	立体的な形態に対する感覚	部分と部分の接合
3	魚の家	形と変形と組み合わせ	もとになる形を生かす

	うちの人と	量感や特徴を大づかみに	いろんな方向から見る
4	まほうのくつ	おもしろい形を大たんに作る	粘土と板と板の接合 いろんな角度から
	むかし話から (集団) うさぎ	大きなポーズとしてとらえる	まとまりのある表現
5	強そうな顔	強調と省略 目鼻口 凸凹の工夫	可塑性を生かして へらの使い方
	荷物を運ぶ人	体の動きから立体的に表す	感じのでの粘土のつけ方
6	さけぶ顔、歌う顔	表情の変化をかたまりで表す	目 鼻 口などの表現の工夫
	演そうする人	量的対比を通しての組み立て	粘土の腰の弱さをおぎなう工夫

実践例としては、空想的な表現の指導として「まほうのくつ」と、観察的表現の指導例として「うさぎ」を取りあげた。

いずれも4年生の題材である。

4 実践例

1 「まほうのくつ」 4年立体で表す

(1) 題材設定にあたって

子どもの生活の中心は遊びである。この遊びの中で子どもたちはいろんな経験をし、学習している。なかでも砂場での砂遊びや水を加えてのどろんこ遊びやダム作りをしている子どもたちの顔には生き生きとして、よろこびに満ちあふれた表情がある。

こうした自然の欲求から出てくる遊びが、粘土によってより生き生きとなされているのが粘土遊びの姿である。

このような素材に対する積極的な働きかけが感触や表現の可能性を体を通してつかませ、粘土の性質を理解させる。

子どもが粘土に触れた時、その触感によって自然に粘土の形を変えようとする。

最も多いのはたたいてつぶすである。粘土板にたたいてつぶすのと、こぶしや手のひらでするのとあるが、形をまとめたり、整えたりするのに便利である。

「まほうのくつ」は板作りの方法を用いて、自分の願いをかなえてくれるくつを作る学習である。

制作活動の中での粘土遊びを、「薄くて大きな粘土の板を作ろう」にした。

粘土の板を作るには、粘土のかたまりを手でたたいたり、押しつけたりする方法 粘土を小さく丸め一列に並べて押しつぶす方法 ローラーで押し伸ばす方法 糸や針金で薄く切る方法などがある。子どもに、いろいろな方法を取り組ませ、板作りだけの遊びに終わらせるのでなく主題表現が深まるよう配慮した。

この学年の児童は、粘土の扱いにもかなり慣れ、指の技術も発達してきてかなり自由な造形技術が備わっている。

この題材では、内的体験として日常生活の中から、自分の夢や願いをかなえてくれるくつのイメージをしっかりとって、最後まで追究する姿勢の中においた。

外的体験としては、アイディアスケッチによって表わしたい形を明確にし、粘土遊びによって板の作り方やその他の粘土操作を再体験させて、確かな手ごたえで主題追求ができるようにした。

そして、いろいろな方向から見ながら作るという立体造形の取り組みの姿勢もつけるように配慮した。

(2) 制作過程

「まほうのくつ」作りの目標と目標達成にかかわる体験を下の表のように設定した。

	達 成 目 標	向 上 目 標	よ ろ こ び を 生 む 体 験
認知領域	<ul style="list-style-type: none"> 自分の願いがかなうくつの形がわかる 粘土を板にし、それを接合してくつにする方法がわかる 形やそれにつけ加えるものにより、自分の願いをとらえている 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の願いをかなえてくれるくつの形を考え、立体に表す感覚を培う 	<ul style="list-style-type: none"> 粘土の性質を知る体験をさせる 願いをもとに発想から制作までの過程を体験させる
情意領域	<ul style="list-style-type: none"> 願いをスケッチやクロッキーにすることができる 独創的な「まほうのくつ」が表出されている くつの形を生かして願いを表現できる 	<ul style="list-style-type: none"> 願いを具体的な形に表現しようとする態度を育てる 制作意図を表出するために働きかける能力をつける 	<ul style="list-style-type: none"> 日常生活の中から、こうあってほしいという自分の願いを思い浮ばせる 友だちの作品を見させる
技能領域	<ul style="list-style-type: none"> 粘土の板が作れる 板と板の接合ができる いろいろな角度から見て作ることができる 	<ul style="list-style-type: none"> 大まかな形から細部に作り進む能力を養う 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の願いにあったくつの形を形成させる

題材名を言っただけでも子どもは作ろうとするもの形やイメージを想像し作り始める。

子どもの内的体験にゆさぶりをかけ、ゆり動かすことで活動がより活発になる。

そこで、制作過程の中でのゆさぶりや情意を4つの段階にわけて考えてみた。

○ 願いや発想の段階

- 自分の願いをはっきりさせる。

→ 文章での主題作り

- 作ろうとする物の立体の感じを大まかにとらえさせる。

○ 構想段階

- 感じや、形の特徴やイメージの表し方を話し合わせる。
- スケッチや粘土遊びを通して感じとった特徴を生かして表現への見通しをもたせる

→ アイディアスケッチ

→ 粘土遊び

○ 表現段階

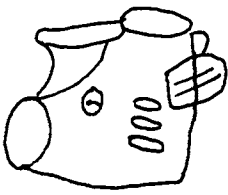
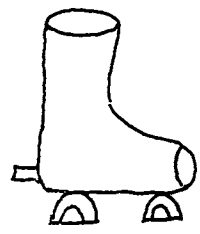
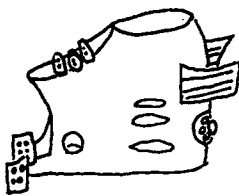
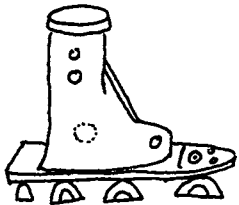
- 自分の願いの形を、考えた方法でくふうして感じを出させる。
- 求めた表現になるまで、立体の感じを工夫して最後まで追求させる。
- まわしてみながら全体の感じをつかんで表わし、作らせる。

○ 鑑賞とまとめ

- 自分の作品を見通し、作品を味わわせる。
- 友だちの作品を見て、よい所を発見させる。
- 表現の工夫やよさに気づき自信や完成のよろこびをもたせる。

各段階では、課題に対してどれ程達成できているか、よろこびや表現の見通しが持てたかなどを、メモで示させた。

(3) 制作過程

過程	教師の活動	時間	R、M 君の活動	N、M さんの活動
課題をつかみ、発想する	<p>粘土でまほうのくつを作 ることを知らせる</p> <p>課題1</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>どんな願いを聞いてくれ るまほうのくつを作りたいか</p> </div> <p>アイディアスケッチをさせ ることにより、構想をふくら ます</p> <p>それぞれの作ろうとする願 いを発表させ、くつの形も発 表させ、いろんな願いとくつ の形を知り、みんながどんな 願いをこめて作る か知らせ る</p>	1	<p>発想</p> <p>宇宙船艦ヤマトのようなくつ を作りたい。はいたとたんに宇 宙へ行けるくつ</p>  <p>いろいろな願いのくつが発表された</p> <ul style="list-style-type: none"> ・足が早くなるくつ 車をつける たくさん足をつける エンジンをつける etc ・空をとぶくつ 羽根をつける プロペラをつける 先をとがらせる etc 	<p>発想</p> <p>足が早くなるくつを作りたい どこへでも早く行けるくつだ</p> 
粘土遊びと板を作る	<p>課題2</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>粘土で遊ぼう。自由に遊 んでもいいですが、必ず 板にする遊びもしましょ う</p> </div> <p>1kgの粘土を与え自由に粘 土遊びをさせる</p> <p>焼成するので、粘土のもみ 方も教える。2つに折り手の ひらでひもにする作業を繰り 返すと中の空気がぬけて焼く 時に割れないことを教える</p>	1	<p>各自で粘土遊びをする。これまでの土粘土による立体表現の学習を ふりかえり、板を作る方法を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・粘土を粘土板に投げつけてたたいた後、手のひらでたたく ・粘土を小さく丸めて一列にならべて押しつぶす ・ローラーで押し伸ばす ・粘土のかたまりを針金で薄く切る <p>粘土板の上に新聞紙をひいて ローラーで伸ばす方法が一番き れいな板ができる</p> <p>ひびが入った時は水につけた 指でならすときれいになった 細くするとすぐ切れてしまう 粘土だった</p>	<p>手に水をつけながら粘土にさわ ると粘土がかたくならなかつた</p> <p>ローラーで板を作るのが一番楽 です</p> <p>手や上着がよごれたけど、とて も楽しかった</p>
課題3	<p>粘土遊びや、友だちの作 品を見て気がついたこと から、作れる形のスケッ チをしましょう</p>	1		

<p>つくる</p> <p>課題4</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>いろんな方向から見ながら、工夫して自分 作りたい形を作ろう</p> </div> <p>各自の方法で粘土を板にし接合してくつの形を作らせる くつをいろんな方向から見させながら、願いがわかる形を作らせる</p>	<p>2</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>テントマン</p> </div> <p>ははいたとたんのうちゅうへ行けるくつ。その名はテントマン</p>  <p>宇宙は暗いので、ライトをたくさんつける さむい時に、しぜんにだんばうが入る 遠くへ行くのでマッサージきを入れる</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>ビュンビュン号</p> </div> <p>さかみちでも走れる すべり台でおどて行く</p>  <p>ローラースケートの先のボタンを押すと、ローラースケートのタイヤがまわって動き、くつの横のボタンで曲ったりする</p>
<p>自分や友だちの作品を見る</p> <p>課題5</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>自分や友だちの願いがくつに表れているだろうか</p> </div> <p>作品を回転台にのせて、回わして見せる 良い所をメモさせ、発表させる</p>	<p>1</p> <p>ていねいに作ったのに、みんなより早くできてうれしかった 外にしかけをつける時に、くつの中に手が入らないのでくつつけるのにくろうした</p> <p>ぼくは「なにほるべー」が好きだ。粘土をうすくして作ってあるし、したの形がとてもおもしろい</p> 	<p>くつのだいたいの形を作るのが一番ひどかった あまりいいのにならなかったけれど、できあがったらうれしくなった</p> <p>私は「ミミちゃん」が一番好きです。わけは、はくちょうの形がよくて、本当におよぎそうです</p> 

(4) おわりに

縄とびがうまくなるくつ、へたな人でも鉄ぼうができるくつといったような、子どもが日常生活の中で感じる、より具体的な願いをかなえてくれるくつは少なかった。

しかし、作ろうとするくつの発想が似かよっていたために、友だちの作っているのを見て多面的な見方や接合の技法を学んだり、自分の作ろうとする願いの意図をたやすく知ってもらったといった良い面もあった。

2. 「うさぎを作ろう」 4年 粘土

(1) 内的体験と外的体験の融和

—— あゆみより ——

今日は大きいねん土で作りました。小さいので作った時（粘土によるクロッキー）うさぎの様子と気持ちがあわなかった。かっこうをかえて、立っているうさぎにしました。やっぱり立っているうさぎの方が耳をこすっているうさぎより作りやすかったです。



でも、なんとなくつるつるです。みんなのを見るとへらで、うすくほりおこしたような感じでした。すぐやってみとうさぎの感じができました。

ねん土は、けずったり、まげたりしてなおせるからおもしろかった。また、ねん土をしたいです。

—— 11月2日 —— 寺畑 正和 ——

動きのあるうさぎの姿を粘土表現することは本来は非常にむずかしいことである。だが、4年生になると写実的傾向が強まってくる。そのため、写実を手がかりにしながらも、心象的な要素をじゅうぶんに加味して表現させ、写実性の意味をしだいにわからせたい。

ひとりひとりの子どもの表したい願いと立体表現が結びつく深さの度合がよるこびの大きさに比例すると考える。度合をたかめるためにはうさぎの動作を観察して受ける感情と、粘土の扱い方の能力との一致が必要である。

そこで、うさぎに対する心象を明確にしていくな内的体験と技能をたかめる外的体験との融和を計るための、ゆさぶりと操作の根幹をうさぎを「見て願いをもち、見て立体表現をする」においた。よろこびにつなげる体験活動の内的体験と外的体験を次のように設定した。

○内的体験の方向として

①うさぎに対するイメージをしっかりとつかむ。

かわいらしいなどの概念的な心情だけでは、うったえる力が弱い。概念くだきをするために

うさぎの動作と結びつけて心情をさぐる。そのために、飼育小屋のうさぎの姿態の観察を重ねながら心情をたかめていく。

②意図的な表現で意欲をもつ。

イメージをどのような手順、方法で作っていくか、およその見通しを立てて制作する。制作計画を各自が持つことによって追求する意欲をたかめていく。

③イメージのふくらみと発展をもつ。

意図的な制作を柱としながらも、ふと気づいた形、技法のひらめきの心情も大切にしていくな。

○外的体験の方向として

①うさぎの姿態のスケッチをする。

イメージをしっかりとつかむために、様々な動作をスケッチして、たしかめた形から主題をはつきりしていく。

②立体クロッキーをする。

平面的なスケッチでは立体が確かめられない。そこで、少量の粘土で形象化して立体と追求の方向の目やすをつかんでいく。

③大まかな形から制作する。

うさぎを大まかな塊でとらえて細部にわたる制作態度をとる。計画的表現をすすめるために5～6コマの手順図を描き手順をはっきりする。

④うさぎとふれ合いながら制作する。

つくりだすよろこびを強くするために、常にうさぎ、スケッチ、クロッキーを身近かに置き手でさわって、目でたしかめて、ひらめきを大切に主題にせまっていくな。

題材設定にあたって、よろこびにつながる体験として、造形的認識にかかわる内的体験と造形意識・造形技能にかかわる外的体験とは渾然一体となって作用していくことを願った。

そのためには、動きや感情を移入しやすい動物、しかも、見ながら触れながら制作可能なうさぎを設定した。このうさぎ制作の体験によって、立体表現についての認知・技能・情意を体得させ、ひいては造形活動一般にも広めていくことを考えた。

(2) 情意のたかまりを大切に

うさぎ作りの目標と目標達成にかかわる体験を下表のように設定した。

	達成目標	向上目標	よろこびにつながる体験
認知領域	<ul style="list-style-type: none"> うさぎの姿勢から動き、量感をとらえることができる。 動き、量感からうさぎに対する感情をとらえることができる。 うさぎを一個のかたまりとしてとらえることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 動作の瞬間の姿態の特徴をとらえる力を養う。 動作からの印象を立体的に表す感覚を培う。 	<ul style="list-style-type: none"> 自己の目や手を足がかりにした発想から制作までの過程を経験させる。 うさぎと触れ合いで発見させる。
情意領域	<ul style="list-style-type: none"> 独創的にうさぎの姿勢をとらえることができる。 手、足、胴の動きから感情があらわすことができる。 粘土の可塑性、へらの特性を追求することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 量的な美しさをさぐり出せる力を育てる。 制作意図をもって、主題表出に働きかける能力をつける。 	<ul style="list-style-type: none"> うさぎを見たり、さわったりしてスケッチ、クロッキーでたしかめさせる。 何枚ものスケッチでうさぎの様々な動作をさぐらせ、感情と一致する動作をえらばせる。
技能領域	<ul style="list-style-type: none"> うさぎを大きなかたまりでとらえ、次に削りだしたいの形にする。最後に細部の形成をして完成する。 粘土を目の高さで回転させながら立体表現をする。 	<ul style="list-style-type: none"> 大まかな形態をとらえて表現できる能力を養う。 効果的な技能を開発しようとする力をつける。 	<ul style="list-style-type: none"> 制作手順を図示してクロッキーでたしかめて形成させる。 制作途中でのひらめきを大せつにしながらか形成させる。

学習計画を下表のように設定した。それは外的な体験と内的な体験を関係づけて、わかる、できる、みつげだすよろこびに結びつけることとした。() はよろこびにつながる情意

外的体験 の過程		願　い　・　発　想			構　　想	
内的体験 の過程	時間	うさぎの観察をする	課題をつかむ	粘土遊びをする	手がかりをつかむ	
		事前（業後）	2		1	
	気をひかれる	姿態のスケッチ をとる	うさぎの様子 と感じで表現 主題をつくる	粘土をちぎる、 まるめる、おす つまむ、つなぐ 卵形をつくり、 追加して好きな ものを作る	・ 一握りの粘土で主 題にかかわる形をク ロッキーする ・ 粘土の扱い方と表 現方法を試みる	
	作ることを意識 した受け入れ	様々 な姿勢				
		取り組みの方向 の明確（意欲、感動）				
ひらめき	粘土についての処理法 （わかる、できる）					
たしかめ		ひとりひとりの主題と形象化の効果のさぐり				
		（えとくする、みつけだす）				

(～は次頁の表につながる)

外的体験 の過程	構 想			技 能	鑑 賞
	想をひろげる	想をねる	制作の見通しを立てる	つくる	作品鑑賞
内的体験 の過程	時 間			1	2
価値づけ	友達のクロッキー作品から参考になる点を見つける	大まかな形から細部に作り進む技法を知る	①塊り ②削る ③だいたいの形作り ④細部づくり 図工ノートに図示する	粘土をつけたり、削り取ったりしながら主題に近づけていく 一個の塊りとして大きくとらえていく	①動き ②量感 ③形 ④粘土の処理 ⑤一個の塊りとして 感動と技法のあらわれ
	彫塑表現法の大せつなところをつかむ (共感 えとくする)				
価値の組織化	自己の課題の追求方向の明確化 (さぐる、つくりだす)				
つくりだす	自己の課題表出に集中 (入りこむ、工夫、さぐる、みつけだす)				
	自己の課題への確認 (満足、充実、ふりかえり)				

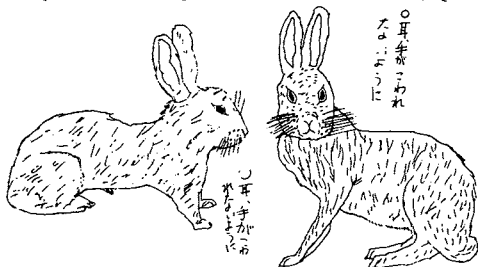
(3) 授業の実際

時間	教師の活動	クラス全体の活動傾向	T 君 の 活 動
業後の時間を10分ずつ6日 うさぎを観察する	1. 粘土でうさぎを作 ることを知らせる	うさぎについては概念的 にしかとらえていない。耳が長い、ピョンピョンはねてかわいいなど	
	課題1 うさぎの色々のか わった動作をスケッチ してみつけよう 図工の時間の10分間 学級終礼の10分間さい て一斉にうさぎをスケ ッチさせる。 一日に一回で一週間続 ける。同じ動作のうさ ぎは描かないで、必ず ちがった動作のうさぎ を描かせる。 今まで気づかなかった 動作に目がむくように させる。	飼育小屋に行って スケッチする。 スケッチする子ども達	スケッチ 図工ノートより No1 立っている No2 シャが んでいる うさぎ しゃがんでいるう さぎ ○ 体がたおれな いように作る ○ 耳がたおれたり 足がまわったり 作らないように する

№3 走ろうとしている №4 横を向いている

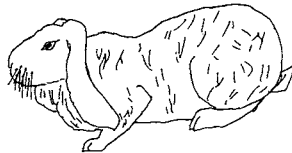
走ろうとしているうさぎ

横を向いているうさぎ



№5 耳をたおしている

耳をたおしているうさぎ



○手がたおれないように

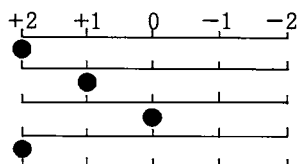
いろいろな動作をして人間のようにした。見て書く時すぐ動作をかえてしまうのでむずかしかった。でも、動作によってかわいらしさがちがうのです、すごく楽しかった。

とても やや ふつう やや とても

+2 +1 0 -1 -2

スケッチ	たのしかった	24人	9人	1人	0	0
	見てかいた	18	14	2	0	0
	よくかけた	6	9	12	4	3
	やりたい	25	7	2	0	0

(項目は左と同じ)



2

課題2 うさぎの動作と自分が感じたことをもとにして、作りたいうさぎをきめよう。

自分のスケッチからうさぎの気持ちがよくあらわれているものを選んで決定させる。
うさぎにたいする気持ちはうさぎと自分の関係があればよいことをアドバイスする。

課題3 粘土で遊びましょう。

粘土の性質を理解させるために次のことをさせる。粘土をちぎりましょう。ピンポン玉にまるめましょう。10こつくりましょう。積み上げましょう。ひもにしましょう。ひもをつぎましょう。ピンポン玉を3個あわせて卵がたにしましょう。卵がたをもとにして、好きなものを作りましょう。

隣のN君、M君とどれにしようか話し合っていた。№6の耳のたれている可愛らしさに心を動かされていた。だが、自分とのかかわりから№1を選定した。

制作主題は、はくの方をむいて、えさをほし
そうに、せのびして立っているうさぎと決定した。

今日の図工の時間はねん土遊びです。はじめにねん土をちぎってまるめます。ちぎっては手をしめらせまるめ、ちぎっては手をしめらせまるめました。こんどは、それをつんでまたこわしてたまご形を作りました。このねん土いじりをやってみてよく分かったのは、手をしめらせねばいけなとかへらの使い方です。丸めたり、こねたりで手がきたなくなっただけできたなくなればなるほどおもしろかったです。

課題3 どうしたら自分の思うとおりになるかためてみよう

粘土クロッキーでアイデアをさぐる
クロッキーの視点
○心情表出のための形
○形のつりあいと方向
○粘土の扱い方

クロッキー

		+2	+1	0	-1	2
たのしかった	26人	7人	1人			
作り方がわかった	13	17	4			
思うようにできた	8	10	7	5	3	
苦労した	11	8	12	3		
うまくできた	1	6	13	9	5	
こんどはうまくできそうだ	23	8	3			

つまらない
わからなかった
できなかった
苦労しなかった
へたになった
だめだ

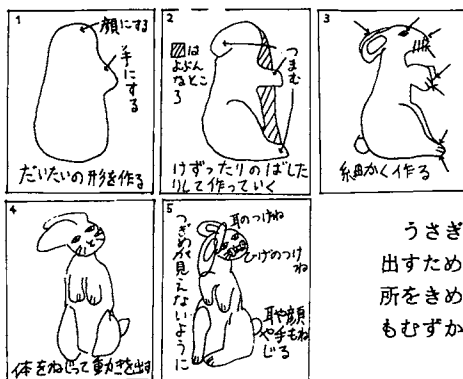
ねん土クロッキーをしてうさぎの形がよくできてよかった。おもしろい形になった。

1 課題4 うさぎを作っていく順序を図であらわしてみましょう。

図示するときの条件を規制した。

- ① 大きなかたまりから細かいところへすすむ。
- ② 5～6段階ぐらいの手順にする。
- ③ 注意することを書きこむ。
- ④ 動作のあらわし方で気持ちを出す。

作る見通しの図



うさぎの気持ちを表すためにねじる場所をきめるのはとてもむずかしかった。

2 課題5 形、やり方をくふうしながら自分の感じを出そう。

制作ポイントを明示する。

やり方	形
つなぎめ ひきしめ ふくらみ	1つの塊り 動き、方向 つりあい

感じ
かわいらしい やさしい

N子の完成作品



完成作品



「うさぎを作ろう」の制作を終えての子どもの意識

	+2	+1	0	-1	-2
楽しかった	16人	11人	7人		
あらわされた	12	8	4	7	3
苦労した	23	9	2		
うまくできた	7	11	6	6	4
工夫した	18	11	4	1	
またやりたい	21	9	2	2	

制作を終えて

- ・小さいのをしてから大きいのにしたことがよかった。
- ・と中で作り方を説明したことがよかった。
- ・体をねじらせたことがよかった。

(4) 学習後の考察

よろこびの原点をひとりだちに求めて、内的体験と外的体験の融和にあると考えた。そのために、うさぎの姿態の観察、粘土クロッキーによる手がり、制作の見通しをたてる図示を設定しゆさぶりと操作を注入した。形成そのものには子どもの意志にまかせたことがつくりだすよろこびを与えたと思われる。

5 おわりに

本年は粘土でよろこびを生む授業を求めた。本来子どもは創作することが好きなものであるけれど、作品の質がどうかかわるのかが大切である。今後は子どものよろこびと作品の良さとのかわりを考えていきたい。